

れ い せ い 聖 聲

2000年5月号

<主な内容>

新年聖会の恵み(1頁)

牧師リトリートの報告(3頁)

北米ホーリネス教団の歴史(5頁)

OMS Holiness Church of North America

<http://www.omsholiness.org>

Web Version

南加宣教大会は、講師に、岩永リック先生、古山隆先生を迎え、三月二五日、サファナンド・ヴァレー教会で行われました。午後からは、多くの兄弟たちが、短期宣教師の経験をシェアしてくださいました。また、各教会からのミニストーリー・ブースも出され、それぞれ趣向を凝らしたパネルを楽しみました。次に、メッセージとシェアリングの要約を掲載いたします。



南加宣教大会の恵み

午前の部
岩永先生のメッセージの概略

「実際、わたしたちの主イエスの来臨にあたって、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あなたがたを外にして、だれがあるだろうか。あなたがたこそ、実にわたしたちのほまれであり、喜びである。」(一テサロニケ一・一九〜二〇)

ピラミッドも、ゲティ・ミュージアムもやがては、砂に、石ころに変わる。この世にいつまでも残るものは救われた魂である。

私は十三年、ブラジルで宣教師として働いた。奉仕を始めたばかりの頃、その町でも有名な酔っ払いが教会にきた。彼は、四十年近くも酒浸りになっていたが、私の話しを聞いて、信仰を持ち、その日から酒より解放された。

小松さんという日系の方は肝臓病だった。話を聞いてくれたが、イエスを信じなかった。日本に六ヶ月治療に行った。彼が、日本か

ら戻ってきており、私に会いたいと願っているというのを聞いて、彼を訪ねたが、私が彼のところに行く前に、彼は亡くなった。このように、福音を伝えることは、人の運命を決定する。

使徒十三章には、アンテオケ教会からパウロ、シラスが宣教に遣わされたことが書かれている。ここから、教会は宣教においてどのような役割を果たすことができるか、学ぶことができる。

まず、宣教のわざは、神にお仕えしたいという心からはじまる。アンテオケの教会は、神のわざに対してエキサイトしていた。私たちは、自分の地域だけでなく、遠い世界にも宣教したいと願っているだろうか。神は失われた羊を愛しておられる。神は、働き人を求めておられる。神は、ローカル教会を、宣教師を育てるために用いられる。私は、ある教会で他の人より二十才も若いのに、議長にしていたとき、良い訓練を受けた。若い人を育てよう。宣教に出ていく教会は、そういう人がいる教会である。

第二に、霊的な感覚が必要。アンテオケ教会は、断食をし、聖霊の声を聞くこととした。ブラジルに

いて良かったことは、家族、友人から、アメリカの生活習慣から離れていることだった。ブラジルでの予定は、みな主のためのものだった。アメリカでは、人間的なことに忙しすぎて、聖霊の声を聞く機会を失っているような気がする。神がだれかを宣教のために遣わそうとしておられる時、教会はその人のために何が出来るだろうか。神は、教会にとって必要な人を宣教のわざに召されることがある。しかし、働き人を宣教の場に遣わすのは、教会の使命である。アルバナの宣教大会などに人を送ろう。そして、自分達がサポートしている宣教師としっかりした連絡を持つていよう。もし、宣教師に働きの実がなければサポートを停止することもあり得る。宣教は、聖霊の声に敏感だった教会からはじまった。

そして、第三に、四節から十二節には、神が宣教のために何をしてくださるかが書かれている。魔術師エルマは、パウロの伝道を妨げようとした。しかし、神の力がエルマを盲目にした。パウロやバルナバの力でなく、神の力が宣教を支えた。神の働きなしに、宣教師は働きをすることができない。

私は、フィラデルフィアで四十五名の宣教師と共に訓練を受け、ブラジルに遣わされた。まず言葉の面で苦労した。家内は蚊にかまれて足がはれた。十二歳の売春婦が救われたり、十年の自分の娘を虐待していた日系人を説得するよう待っていた日系人を説得するようなこともあった。一緒にブラジルに行った宣教師の多くが途中でやめていった。私が支えられたのは、神のわざだった。

教会は船である。船に乗らないで、水泳を楽しんでいる人もいる。しかし、嵐がやってくれば、泳いでいる人は波にのまれてしまう。

船にいる人は、その人たちにロープを投げなければならぬ。ローカル教会での伝道は、近くの人々にロープを投げることであり、宣教は、ロープを遠くに投げることである。宣教地でしていることも、地域教会でしていることも内容的には同じである。魂の救いのためにロープを長くし、遠くに投げようではないか。

午後のシエアリング
高吉聖吾兄、溝口ジェイミー姉（L A 教会）

一九九九年夏、坂戸教会で、日本の若者たちと教会との橋渡し役

の仕事をしてきた。帰国後、今度は、教会内の高齢になって礼拝に出席できない二世の方々を訪問することに於て、高齢者と若者の橋渡しとなる奉仕をしている。

エド・ダン兄（サンディエゴ教会）
退役軍人としての特権を生かして、セルフサポートで日本の教会を助けた。そのために神学校で学び、仕事をして、サポートを蓄えている。若い人ばかりでなく、退職者も、宣教のために働くことができることを、知ってほしい。

神村ジョージ兄（ホイットヤ教会）
日本にいる宣教師から「部落民」という言葉を聞いた時、ショックだった。その実態調査のために、この夏日本に行く。主のあかし人となれるよう、祈ってほしい。

木谷クリス兄（サンゲール教会）
日本の企業に就職し、六月より技術者として日本に行く。日本には、こちらのユース・ミニストリーのようなものがないので、アメリカで育った日本人であることを、主のために用いて、日本の若者のために働きたい。

古山先生のチャレンジ・メッセージの概略

さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであつて、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」（使徒一・六〜八）

「あなたがたは・・・わたしの証人となる」というのは、宣言の言葉であり、主は、私たちすべてが、この世界に出て行き、その証人となることを願っておられる。しかし、その「時期や場合」は、主がお決めになる。人間が良いと思つたことが宣教につながるかもしれないし、私たちがとつて悪いことと思えることが宣教の拡大になることもある。実際、使徒行伝八章では、エルサレムに迫害が起こり、人々が散らされていったのであるが、それが、世界宣教につながつたのである。

私は、ハワイに八五歳になる叔母がいるが、彼女はケア・ホームにいるアルツハイマーの人の祈りを通して、救われた。このアルツハイマーのクリスチャンは、他のことは忘れても、主の救いは忘れることがなく、祈りの時に常にイエスの救いを感じていた。それによつて叔母は救われた。「時期や場合」は人の知るところではない。主が用いてくださることを信じて、出ていこうではないか。

北加でも、四教会合同宣教大会が四月二日サンロレンゾでもたれました。ブラジル北部のベレン郊外で最初の日本人教会を建て生涯四〇年余りを主に捧げ山田等師は「すべてを捧げ、後戻りも、後悔もしない」と人が救われて主に仕えていく姿をみるからこそ大きな喜びと、同労者のメインスピーカー、山田キャシー夫人は「宣教活動には犠牲が伴いますが、主の愛を伝えるのは義務ではなく光栄であり、特権であり主から与えられたタレントを用いて様々な所と方法で宣教活動が可能である」と、バイタリティに溢れた励ましのメッセージをされました。

そしてフリーモントのジョ

ー・ロバート師と御令息のブライアン兄がブラジルでの、又福本兄姉がメキシコにおいての夫々宣教活動の証しをされチャレンジをいただきました。

私たちは、みな 同じ信仰、使命、そして伝統に立つ、同じ教団の一部分ですが、それぞれの教会には、その教会の置かれた場所や歴史によつて、それぞれ独自のミニストリーが展開されています。コリント人への手紙第一、十二章に、「実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くものからできている。もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言つても、それだからだに属さないわけではない。・・・もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかくのか。そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである」とありますよつに、神は、それぞれのユニークさを用いてくださいます。今月から、そうした諸教会の「ユニークなミニストリー」を紹介していただく企画を立てました。教団の諸教会がお互いから学び合える、良い機会になれば幸いです。

わたしたちの教会のユニークなミニストリー サンディエゴ教会・サポートグループ



マーシャル初音

(写真は、一九九八年七月、T&Gカウンセリング・セミナーでサポート・グループの紹介をする筆者。このセミナーで学んだ方々によつて、日本の教会でもサポート・グループが始められるようになった。)

私たちは、それぞれの人生で色々な課題をかかえながら生きています。私たちは病氣、離婚、死別、家庭内のトラブルなどに悩まされます。ディスファンクショナルな家庭に育つたことから特定の行動パターンを持つたり、劣等感、怒り、恨み、自己憐憫、甘え、不平不満などが心の奥深くに根付くようになり、そのような状態の人との結婚生活によつて心に深い傷と、悪い影響を受け、他の人との関係に支障をきたすようになりま

す。これらの事は、決して神を喜ばせることは出来ません。ですから解決する必要があります。

私たちクリスチャンは、すでにキリストの十字架による罪の解決を与えられ、新しく生まれ変わっています。御霊の導きによる、聖められた生活が、日々のライフスタイルとなるためには、なお、踏まねばならないステップがあります。そのために、私たちは「十二ステップ」のモデルにもとづいたサポート・グループを発足させました。このサポート・グループは、一九九二年十一月に、中尾牧師の理解と協力のもとに、必要を感じた六、七名によつて始められ、「葦の会」と名づけられました。この名はイザヤ書六十章四二節の「彼はいたんだ葦を折ることなく、

くずぶる燈火を消すこともなく」とある部分から取られました。私たちは弱く、痛んだ葦のような存在です。しかし、主はそんな私たちをかえりみてくださいます。この主の愛がグループの中に、そして、教会全体に広がるようにとの願いがこの名にこめられています。

サポート・グループの中心になっている「十二ステップ」は、もとはアルコール依存症からの回復のプログラムとして作られたものですが、今は、さまざまな心の問題に対処するために用いられています。私たちは「十二ステップ」を聖書の光の中で用いています。「十二ステップ」の概略は次のとおりです。

自分の無力を認める。
神がなしてくださることを信じる。

すべてを神にゆだねる。
自分を顧み、道徳面で自己反省をする。

自分のあやまちを認める。
自分の性格上の欠点を神にゆだねる。

神に謙虚に祈り求める。
自分が害を与えた人々に償いをすることを決心する。

償いを実行する。

引き続き自己反省をする。
神との交わりを祈りと黙想によつて深める。

自分たちのいやしの経験を他の人と分かち合う。

サポート・グループは専門家によるグループ・カウンセリングでも、たんに不満を吐き出す場でもありません。共通の課題を持ったメンバーが目的に向かって自分の課題に取り組み、お互いを受け入れ、励ましあうグループです。今まで、「十二ステップの学び」「依存症からの解放」「怒りを扱う方法」などを学んできました。

このグループで使っている教材は、「アラノンで今日一日」の他は、ほとんどメンバーの手作りで、みんなで翻訳し、タイプし、印刷してきました。出版社から版權を得て、二六五日のデポジション「一日一歩」を出版し、他の教会でも用いていたできました。今は、二百五十ページの「十二ステップ心の旅路」を完成させ、これに従つての学びが始まりました。
サポート・グループにはいくつかのスローガンがあり、毎回、全員で唱和してからミーティングを始めます。それは、次の五つです。

この場所で見たと、聞いたことは、この場所に置いて帰りましょう。

他の人の発言を批判ではなく、愛をもつて聞きましょう。

手から離して神にあずける。

自分自身に生き、他の人は他人自身に生かしめよ。

気楽にいこう、今日一日。

この後、プログラムに従つて学びとシェアリングの時を持ちます。

司会者は皆で持ちまわりでします。発言する時は、手をあげ、司会者の許可を求めて発言します。その時は、皆が、話している人に注目しなければなりません。また、ひとりの人が話を独占しないために、ひとりの人が話す時間はおよそ五分に制限されます。最後に主の祈りで閉会します。

サンディエゴ教会でのサポート・グループは最初はひとつでしたが、一年後に異なった課題を持った人々の必要に答えるため、二つ目のグループができました。その後、いくつかの経緯をへて、現在は、二つのグループが活動しています。これらのグループを通して、救われ、バプテスマを受けた人、信仰を成長させて教会の役員をして奉仕しておられる方が起こ

されてきました。サポート・グループの働きがクリスチャンの間で正しく理解され、これからも、多くの人の心のいやしと神の栄光のために用いられるよう、祈っています。



祈りの課題

夏期修養会(七月四、八日)講師、ヘルムート・シュルツ先生と葛原千秋先生が健康を支えられ、良いご奉仕ができるように。また、夏期修養会が多数の参加者によって祝福されるように。

各教会で選出される新年度の執事、理事のため、また、各教会での教会総会のため。

百日連鎖祈禱が、中だるみすることなく続けられ、祈りによって豊かな祝福を得ることができるよう。

サンディエゴで行われる教団総会(七月十四、十五日)と、大倉師、本多師の按手礼のため。
今年高校、大学を卒業する若い方々の人生が主によって導かれ、用いられるように。

献身者が起こされるように。

日語部と英語部の関係

信徒の観点から

去る一月の牧師リトリートでは、日語部と英語部の関係についての本多一
米先生の論文をもとに、この主題を牧師たちで話し合いました。牧師リト
リートとの報告と、本多先生の論文をウェブページに掲載したところ、それ
に対して信徒の方々から次のようなコメントが寄せられました。この議論
を深めていくために役立てばと願ひ、掲載します。

わたしは英語部の兄弟の意見を
読んで大変ショックであった。日
語部と英語部の間の溝となる問題
を明らかにするには、包み隠すこ
とのない率直な意見は、大変良い
事だ。しかし、その意見があまり
にも攻撃的で、「経済的に寄りか
かるやつかい者、神学的見張り人」
等の呼び方をし、日語部の存在を
見下げ、嫌がっているのが明らか
に分かる。日語部も英語部も神の
前にかげがえのない存在で、神様
が良しとして、このグループ備え
をしてきてくれたのではないか。
確かにわたしたちは、他のチャー
チグループと違ったユニークな問
題、文化や言葉の違いがあるが、
お互いに歩み寄り、違いを理解し、
助け合っていったら、もっと広く

大きな神の働きが可能になると思
う。この兄弟のような意見は、信
仰を持つ者、福音に立つ者の理解
を働かせて、弱点を乗り越えた所
に、世には見る事の出来ない主の
栄光が輝き、主の証しとなる教会
となるのではないか。世と同じ、
または世よりも霊的に下では、教
会の意味がうしなわれる。教会員
一人一人がもつと福音に生きる事
が出来よう心がけ、祈りに励み、
また教会も教育指導に励んで行か
なければいけない。牧師同志の関
係で、同じ屋根の下に二人の長が
いる、という所に色々な問題が出
ることは分かる。わたし自身その
事を見てきた context は、当然
避けがたい事だと思ふ。しかし牧
師同志の一致は、とても重要な事

であり、通訳をつけてでも良く話
し合い、祈りあって、解決してゆ
かなければいけないと思ふ。恵み
は上から下に流れるもの、不一致
は信徒に悪影響を与える。牧師同
志の一致が無くて日英の信徒の一
致はありえない。どちらか一人を
主任牧師として、事務的に表面
うまくいっただとしても、根本的な
問題解決にはならず、新たな形で
問題がうかび上がってくると思ふ。
著者の結論と勧めにある様に一人
一人が御言葉に立って、御言葉を
実施しようと努力しつつ、神の助
け、導きを仰いでゆくとともに、
解決が得られるのではないかと、
わたしは思ふ。

教会での一致は、聖霊による一
致で、キリストにあつての完全な
一致であるから不一致がおこる事
には、何かの原因があると思ふ。
「日英の文化、言葉の相違とか、
コミュニケーションの不足とかと
言われるが、確かにその一因もあ
るかもしれないが、それ以上に罪
の現実を直視する必要がある」と
あるが、まことにそうであると、
わたしも思ふ。わたしたちがどの
ように、自分の価値感や文化を当
てはめていくか、違う言葉や、文

化をどのように理解し、尊重し、
受け入れ、支持し、援助しあつて
いくかという事が大切で、そのた
めには、主にあるまことの愛なく
しては出来ない事だと思ふ。まず
教会の指導者たち牧師が、お互い
に良いコミュニケーションを主に
あつて持たずして良き教会は出来
ず、また信徒に及ぼす影響も大き
いと思ふ。日英どちらの部にとつ
ても、効果的なミニストリーのた
めには、協力する必要がある、両
語部にとつての使命は一つ、主を
宣伝える事であるので、その点に
いつも互いに霊の目を主にむけ、
協力し、助けあう事が、必要だと
思ふ。日英の一致は只一緒に集会
を持つことではないとわたしは思
う。それぞれ集会の持ち方が、違
うので、話しあい、祈りあう交わ
りが大切で、特に信徒を代表する
合同の執事会は、お互いにゆつく
りと話し合う時として有効だと思
う。教理の一致も大切な事だが、
救われたわたしたちは、みなキリ
ストの内住を信じ、体験し、互い
に同じ御霊を持つ者として、共感
し、主にあつて同じ思いと、考え
になるはずだと思ふ。きよめられ
た者同志に、どうして主にある一
致が欠ける事があるのだろうか。

教会は愛によって建て上げられていくと、エペソ四・十一〜十三、十六にある。

千差万別の意見がでてくるのは、罪に支配されて生活している現在、この世の観点から見れば当然で、利己主義的な、非建設的な意見が多く見つけられる。これは当然の現象だろうが、一旦キリストともにも十字架につけられ、生まれ変わった真のクリスチャンの意見は、当然神の教えの聖言葉に徹した「謙った心の、自分の犠牲をも厭わず、行動を第一に示し、そのうえに神の御旨になつた意見を出すべきで、愛のない批判や意見は、悪魔の餌食にしなければならないことを、真のクリスチャンは、深く認識したうえで、自分の意見には責任を持ち、発言すぎだと思つ」。過去三十余年間の、特に米国内の、墮落の度合いのひどさを見れば判る様に、もう全能の神の忍耐の限度を越え、何時全滅されても仕方のない状態を呈している。この様な現状をわたしは恐ろしく憂慮している。特に我等の教団の土台を築いて下さった、神の聖言葉に徹して信仰の手柄を残して下さった宝を、しっかりと受け継ぎ、次世代

へと確実に伝えていかなければ羅針盤を失つた船の様になりかねないのは、火を見るより明らかな事と大変憂慮している。わたしは日系教会には十八年間、米国教会には二九年間と移転する度に異なる教会を経験してきた。とても規律正しい教会がほとんどであった。この教会にはまだ三年で、ホーリネスの Constitution や Guide-Book は、まだ良く分かつていない。現状を見て判断すると、英語部など普通のアメリカの教会と比較して見て、明確なガイドラインが無いのか、また本部は役割を果たしておられるのかと思わされる。例えば、アメリカの教会では、ミニストリーの牧師なら特別の用以外には何時でも毎日決まった勤務時間には、教会に居り、緊急の時、何時でも連絡出来る様にしてるのが常識である。また、日系教会は、地域により、メンバーにより特に牧師は日語と英語両方判る事が必要条件であり、その事も、充分考慮して、本部は牧師の異動計画を実行しているだろうか。規律正しく神のみ旨になつた兄弟姉妹の愛の有る所にしか、新しい神による兄弟愛は生まれて来ないと信じている。

一、序論で、神の家族が一致出来ない事に痛みを覚えると言う一文に、わたしも前から痛感している。この事を論文に取り上げて下さり、心から感謝している。そしてこれは牧師方の悩みであるばかりか、イエス様の体の一部であるわたしたち一人一人の問題でもある。わたしの目から見ると、当教会の日語部は、比較的、牧師を助け、みんなが出来る所で奉仕と、伝道に励み、一致していると思う。二、わたしたちの教会では、かなりコミュニケーションがゆき届いていると思われるが、アンケートにある教会では、コミュニケーションの問題で、両者間の一致の出来ない原因がそこにある事がわかる。各教会の牧師方は、牧師同士で、週に一回でも、共に祈るときを持たれておられるだろうか？

互いの言語の違いから、祈りあうのは大変な事だと思つが、相手を思いやって相手のために祈る時、聖霊様が働かれる。また、悔い改めを持って、教会の前進のため、祈りあってほしいと願う。また、リーダーの方々も、せめて月一回でも、(議論は抜きにして)一致のために、メンバーのために、祈つてほしいと思う。

三、役員会に提出された議事録などは、英語の場合、日語部の牧師や役員が理解出来るように、(逆の場合も)前もって議事録を配り、理解と準備する期間を与えれば、議事の進行はスムーズに行われ、両語部の良い関係も良く行われると思われる。

四、英語部の牧師先生方に、日本の文化、バックグラウンドをもう少し学んでほしいと思う。またお互いに、相手の言語を学ぼう、理解しようと思つた努力される事は良い事だと思つ。わたしの働いている会社では、多くの外国語を話す人がいて、日本語のカンパシーションを学び、理解しようとしている。

五、教団内のコミュニケーションも、牧師方が、「知らなかつた」と言つ事が無いように、努力される事を望む。

六、インターネットは、良いコミュニケーションの場なので、多に活用してほしい。

七、論文の「C」良いコミュニケーションの回答に上げられている事が、両語部が理解しあう上において、非常に大切な事だと思つ。

- a. 牧師同士の明確な理解を求めらる。
- b. 共に祈る。
- c. お互いの限界を乗り越えるために、可能性を見出そうと努めること。
- d. 包み隠す事の無い、率直なコミュニケーション。
- e. 問題を話し合うために時間を割く事。
- f. 問題が起こった時には、顔を合わせて話し合う事。
- g. お互いがお互いを理解するまでは、線引きをしない事。
- h. お互いについての中途半端な情報を他に流さない事。
- i. お互いを友として受け入れあう事。(これが出来ないと、世の外部の人に負けてしまう。相手の短所と思われる事について、祈る事が大切だと思う。)
- j. 牧師同士が、生活や家族の事などの事を、共に話し合い、分かち合い、そのために相手を理解しあうて祈りあう。
- k. お互いを受け入れるために、色々な違いを超えて、真剣に祈っておられるだろうか。
- l. 日英合同の集会、または会議の時は、英語が中心で行われる事が多いが、日語部の牧師、役員方

にとつて、大変だと思う。その事を英語部の方は、どのくらい理解しておられるだろうか。

九、もし牧師間に個人的な性格から来る問題があるなら、それを祈りをもって、聖霊の導きで、解決して頂く必要がある。お互いさばきあうのは良くない、そのまますを受け入れて、祈る事が大切だと思う。アンケートの中から、以上の点がとても大切だと思った。本多一米先生の論文、素晴らしいポイントをつかんでおられ、この事が解決出来たら、それぞれの教会が、さらに祝福され、その事がリバイバルへと導かれる事と思う。

神の家族が「完全な一致」によつて働く上において種々の条件を知る事が出来、先生が論文で、機構やコミュニケーションを扱って下さった事を、感謝して読ませて頂いた。

一、「機構の問題」の経済的分野の中で、経済的問題では、当教会は両語部が助け合い、協力しあい、責任と理解をもって、教会を成長させて来たと思ふ。この事は、かつての日語部は、小人数であったため、英語部の多大なる経済的協力に負うところが多かつ

た。今日あるのは、彼等の愛の協力によつてであり、英語部に対し、心から感謝している。

二、コミュニケーションは言葉だけの問題ではない場合がある。「目は口ほどにものを言う」と言われているように、言葉を発する者が、相手を思いやり、理解しようとする時、良いコミュニケーションによって理解し合える事と思う。

三、一兄弟が助言している様に、教団が英語部の牧師のために、日本の言葉や文化を学べるプログラムを持つ事は大変良い事だと思う。教団に入る前に、東京聖書学院や日本ホーリネス教団の或る教会へ送り出す事が出来たら、大変有益な結果を生み出す事と思ふ。

四、本多先生の「結論と勧め」の中にある様に、「牧師やリーダーは、完全な一致の模範となるべきである」の一文は、牧師同士の関係や、リーダー同士の関係が、信徒に及ぼす影響が非常に大きい事に、特に重点を感じている。霊的愛の一致によつて、「互いに自分よりも相手を尊重する」事により、キリストの血潮のみが、真の一致をもたらす、すべての問題の解決が、この一事であると言う信

仰がホーリネス信仰の基盤にある事を教えられてきた。十字架の贖いの力は、すべてどんな事でも解決出来ない事はないと信じている。「キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れて下さったように、あなたがたも、互いに受け入れなさい。」(ローマ十五・七)

日英牧師間の関係：日語部の牧師は滅私奉公的な所があり、英語部の牧師はビジネス・ライクな所がある。その態度の違いが軋轢をうむ。牧師の一人が主任牧師としてリーダー・シップを執るべきである。互いに言語・文化を理解する努力が必要。

日英合同執事会：合同執事会は絶対に必要。議長は日英両語を理解できる人が適任。

牧師夫人の役割：日語部牧師夫人の牧会に対する影響は英語部牧師夫人のそれよりも大きい様に思われる。

礼拝について：両語部が別々に礼拝を守るとは良いことである。なぜなら、礼拝の中心はメッセージであり、良く解る言語で聞くことが一番である。

両部の考えの相違：どちらが良いい悪いは別として、考え方はかな

り違う。従って、合同の集会は必ずしも一致をもちたらない。

経済的な問題：当教会には存在しない。なぜなら両部とも必要が満たされているから。しかし、多くの教会では相互依存、もしくは一方的な援助によって成り立っており、それによって軋轢が生じている。

コミュニケーション：率直なコミュニケーションが必要であるが日語部は率直な話し合いは不得手である。本音と建前が違う事がある。解り合うまで徹底的に話し合う必要がある。理解出来ない方が誤解するよりましである。言葉をマスターしても文化が解ったとはいえない。日語部の方が英語部よりもグループ意識が強いので個人の意見は通りにくい。日系教会は

日本文化を基にした教会を意味しない。従って、英語部に日本文化を押しつける事は出来ない。特に若い人々には無理である。むしろ日語部がアメリカナイズする必要がある

英語部の必要性：日系教会にとって英語部の存在は重要である。なぜなら日系の子供達や青年が次代の日系教会を担う事になるからである。従って、日語部だけの教

会は早急に英語部を創設する必要がある。

使命による一致：日英両語部がキリスト教会の使命をよく理解、認識する事により一致が生まれる。我々の国籍が天国にあるように、我々にはキリスト教文化という共通の文化がある。この共通の文化を強調することにより一致が生まれる。キリストの愛による一致、信仰による一致、御霊の実を通しての一致が必要である。

神様の求めておられることは靈の一致、一つになる事、愛の神様からいただいた愛によって互いに愛し合う事、愛を世の人々に示す事、それによってキリストをあかししてゆく事です。日語部、英語部共に神様からの愛をいただいて、互いに愛し合い、助け合っているが、かみあわないこと、理解出来ないことがあるように思います。それらのいくつか気づいたことを述べさせていただきます。

・礼拝は別々に持つのが良い。
日語部 英語部の考え方、文化的集会的持ち方が違うので合同は必ずしも良いとは思わない。

・日語部が重要に思うことが、必ずしも英語部では優先されないこともある。

・経済的、働きの違い。
・責任の所在両牧師のどちらかに主任牧師になっていただき責任者になって頂きたい。

・教会学校、ユース・グループの為に、英語部の方々が愛を持って奉仕して下さり感謝。

・合同執事会は必要両語部はそれぞれの個性を尊重し合い、ミニストリーに有効な方法を用いてゆく。議長は出来れば、両語を理解出来る人がよい。

・コミュニケーションの大切さ。お互いに確認し合い決めてゆく。
・日語部の人達の考え方がはっきりしない、遠慮等が英語部には理解出来ない。

・日語部、英語部の時間の使い方
の相違。英語部は合理的である。
・牧師夫人の役割の違い。英語部の牧師夫人は殆ど働いているが、日語部の牧師夫人は教会員のために多くの時間を用い、影響も多い。

・言った事は行動に移し、中途半端にしないこと。牧師同士の理解と祈り合い。

・日語部は全体の意見を大切に
するが、英語部は個々の意見を尊重する。

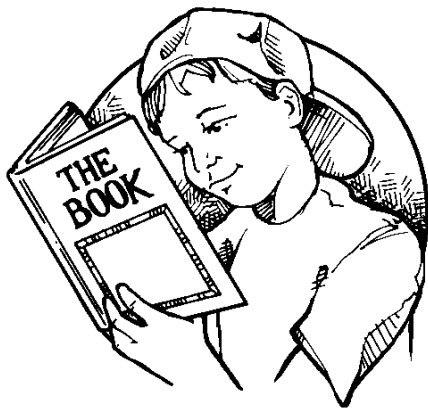
・文化的違いをどのように理解し尊重し受け入れるか、英語部牧師も日本人の事を理解してもらいたい。

・日系教会に属している牧師先生が日本の文化を知るために、サバティカルの時にでも東京聖書学院とコンタクトを取って短期間日本に行き、日本のキリスト教会の事も理解して頂くのも良いのではないだろうか。日語部、英語部が存在するという事は素晴らしい事でありますから、祈り合い、愛し合い、お互いの考えを変えようとしないうで、聖霊のみが私たちを変えて下さる事を信じ、神様に従ってゆくことを願います。

創始者である一世方の健在のころ以来、英語部、日語部の牧師たちを始め、両語部の教会員たちは、実に和気あいあいと、何事も協力しあってきた姿を見てきた。日英両語部間に、また牧師同士の間に、コミュニケーション不足による摩擦が起こっていることに、わたしは大変ショックを受け、心を痛めている。英語部(二世の人達)は、

あらゆる面で日語部を助け、経済的にも犠牲を払ってこられた。日語部も、どんなに感謝をもって伝道に励んで来ることが出来たかと思つ。時代が進み、教会数も増え、教団も大きくなってきた。運営や、ビジネスの複雑化、ハイテク化してきた現今、両語部がなお一致協力して前進するために、今一度うしろをふりかえつて、わたしたちは「どこからスタートしてきたか」を考えるべきではないかと思つ。このような問題を取り上げ、警告を与えて下さつた本多一米先生の、純粋な上よりの勇氣に、心からなる敬意を表し、神様の祝福を祈ります。

私の薦める この一冊



オズワルド・チェンバース
「いと高き方のもとに 三六六
日の黙想」
推薦：吹上信一

「この一冊」と言えば「聖書」であります。この聖書とともに、毎日の霊の糧として、デボーションの本を読むことは、クリスチャン生活に、大きな祝福をもたらせます。私が三年ほど日課として読んだのがいと高き方のもとに「であります。この書をお読みになつて、さらに「いと高き方」のもとに導かれる方々がありますようにと祈ります。

訳者の「まえがき」の一部を紹介
します。

「レイモンド・エドマンはその書の中で、オズワルド・チェンバースを『最高の生涯を送つた聖徒』として紹介しています。今世紀初頭、英国の生んだ偉大な神の人の、自らの体験に裏打ちされたメッセージが聞ける恵みを神に感謝したいものです。」

本文の中から。
「あなたが(キリスト)なる方と正しい関係にあるなら、あなたを通して流れる川にのつて、どのような障害物も問題とならない。あなた自身とイエスの間に、何も

のも置いてはならない。『源なる方』に正しく結び付け。イエスに對するあなたの信仰、彼との関係を十分に見守れ。」

書名：「いと高き方のもとに」
著者：オズワルド・チェンバース

巡回伝道師。最後の五年間はロンドン聖書学校の校長。格調の高いメッセージを語り続け、若い学生たちの魂を揺り動かしたと伝えられています。四三歳の若さで召天。

訳者：湖浜 馨
発行所：いのちのこば社
総ページ：三七五ページ
価格：三四〇〇円(税共)

ロバートソン・マクルキン

「すこやかな時も病める時も」

推薦：藤岡二郎

Ｅメールを開いたらウェブマスターの中尾先生から手紙が届いていました。メールの内容は「私の薦めるこの一冊」への投稿の依頼でした。早速教団ホームページにアクセスして調べました。そこには信仰の養いになる良書を推薦

するということが書かれています。そこで私の乏しい本棚を探して見つけたのがこの本です。私が自信を持つてお薦める本は、このロバートソン・マクルキン著「すこやかな時も病める時も」です。何に自信を持つてかというところ、だれでも必ず一氣に読み通す事が出来るという事には、そして読み終えられた時あなたはきつと爽やかな気分を満たされておられるという事には、結婚式で神の前に誓つた誓約があまりにも容易く破られるこの時代にあつて、神の前で誓つた事をどこまでも忠実に果たして行こうと言う生き方は、多くの人々に結婚の意義を思い起こさせてくれるのではないのでしょうか。この本にはマクルキン博士の夫人に對する深い愛と神に對する信仰に満ちた生きた証しが書かれています。と思います。

書名：「すこやかな時も病める時も」(Living by Vows)

著者：ロバートソン・マクルキン

訳者：羽鳥栄

発行所：いのちのこば社

総ページ：六三三ページ

価格：五八三円+税

東洋宣教会・北米ホーリネス教団史(その十八)

戦後篇

オレンジ郡キリスト教会牧師・杉村宰

太平洋戦争はたけなわであったが、一九四三年の一月から、収容所に幽閉されていた人々は、出所申請を提出することによって開放されることになる。そこで十個所のリોકーション・キャンプに幽閉されていた十二万人にも及ぶ人々は、それぞれの希望する地へ帰ってゆくことになる。この開放によつて以前、西海岸に九十%も集中して住んでいた一世、二世は全米に散在することになる。もちろん西海岸に帰られた方も少なからずいた訳だが、既に三年半以上も家主の居なかつた家は当然のこと、荒れ放題であつたり、あるいは破壊し尽くされていたが、中には近隣の住民達が、彼らの友人であつた日系人の家々を自分の家のように守つてくれた場合も少なからずあつたのである。そんな中で、キャンプから帰還する人達のために教会が中心となつてその門戸を開放したのである。

南加教会連盟は率先して、すべ

てのキリスト教会がその門戸を開くように尽力した。メリノール・カトリック教会はもとより、地元アメリカン教会も協力を惜しまなかつたが、その中でもつとも早く準備され、そして大きかつたものは百五十名も収容できる「エヴァーグリーン・ホステル」と呼ばれるボイル・ハイツにある建物で、フレンド教会の人々によつて運営されてきたものである。フレンド派の人々は、戦争の始まつた時点から既に、敵国人であつた一世、二世に対して常に暖かい配慮を惜しまず、勇敢なまでに助けの手を差し伸べてくれたのであつたが、キャンプから帰還する人々に対しても、またもや多大な援助を惜しまなかつたのである。ちなみに八十年前、ホイッテアのある教会を借りて集會が持たれていた時にリヴァイバルが起こり、それが燃える炎となつて東洋宣教会ロサンゼルス教会が発足したのであるが、その時の教会も実はフレンド派で

あつた。私たちは、彼らに多くの愛の負い目がある。

しかし、すべての教会がその門戸を開いたのではない。救世軍はアメリカの世論を恐れてか、帰還する人々に対してそのドアを開いてはくれなかつた。それがクリスチャンに対する印象を悪くしたのである。救世軍は、キャンプからの帰還者に門戸を開かなかつたというので、未だ日系人の中では立ち上がれないでいる。またメソジストの牧師や、北米ホーリネス教会に關係する宣教師の中でさえも帰還する一世の訪問を拒んだ人達もいたのである。こんな時こそ最善の伝道であつたものをと悔やまれるのであるが……

一九四五年の三月に、八尋ジョージ牧師はコロラドのアマチ・キャンプからロサンゼルスに帰つてきた。彼は二世牧師であり、初代の牧師達の中では、唯一ひとり土地家屋の所有が許されていた人物であつたので、彼の名義になつてい

る牧師館や、ロサンゼルス教会の開放に彼がみずからすすんで挺身したのである。というのも、当時、教会も牧師館も貸してあり、すぐには空けてもらえなかつたからである。しかし、次々と建物が開放されたので、帰還してきた人達のために祈り會が始められることになり、また教会のすぐ隣の建物は他の教会所屬の建物であつたので、そこを帰還する人達のために開放することになったのである。やがて、そこは「ホーリネス・ホステル」と呼ばれるようになり、一九四九年一月まで、帰還する人達に開放されたのであつた。このホステルを利用した人達の中には、サンフアンノ教会の英語部牧師であつた木村連牧師ファミリーや、長い間ロサンゼルス教会の信徒リーダーであつた桑原軍作ファミリー等がいる。そんな中、八尋牧師は自分の生活を支えるために日中はガーデナーとして働き、そのかたわら帰還する人々の世話をするという状態であつた。彼はそのために健康を害し、その命を短めたといわれる。私たちが今日あるのは、彼の多大な献身によるところが多い。